

雑誌『新建築』にみる戦後の阪神間の住宅

——阪神間のモダニズム住宅 その1——

田 中 栄 治

キーワード：阪神間、モダニズム、住宅、『新建築』、建築家

1. はじめに

大阪と神戸に挟まれ、六甲山を背景に広がる阪神間は、明治時代の鉄道網の開通とともに大阪の商人をはじめ、文化人や芸術家に移り住み、明治のおわりから昭和のはじめにかけて良好な別荘地や郊外住宅地として発展した。伝統を重んじる一方で西洋文化を取り入れ、生活を楽しむ趣味豊かな人たちによって、ハイカラでモダンな独自のスタイルが築かれてきたエリアであり、戦後から現在にかけても「良好な住宅地」というイメージが継承されており、関西圏における住文化の発展を担ってきた地域のひとつである。

この稿では「良好な住宅地」阪神間におけるモダニズム住宅(※1)の展開についての考察を行う。そのために、まず雑誌『新建築』に掲載された住宅について調べることから始める。

2. 阪神間、モダニズム住宅

具体的な内容に触れる前に、この稿で使用する言葉について検討をしておきたい。

まず「阪神間」という言葉で表されるエリアであるが、狭く捉えるなら西宮と芦屋の六甲山麓から海岸線までの間の地域を指す。やや広く捉えるならこれらに宝塚周辺を加えたり、神戸市東部の一部つまり東灘の岡本や住吉・御影あたりを含めることになる。これらの地域は行政区による境界を越えて独自の文化圏を形成してきた。しかもエリア全体が一様に均質な状態ではなく、地域毎にそれぞれの個性を生かしながら発展し、かつ全体で「阪神間」というイメージを形成している。ここでは、住宅の展開について考察するのを主目的としているため、周辺地域での動きを含めて考察するのが良いと考え、さらにエリアを少し広げ、東は尼崎、伊丹から西は神戸市灘区までの範囲を対象エリアとして捉えることとする。具体的には尼崎市、伊丹市、宝塚市、西宮市、芦屋市、神戸市東灘区および灘区の六甲山麓から海岸線までの間を対象とする。

次に「モダニズム住宅」について、これも定義するのが難しい言葉であるが、日本建築学会の DOCOMOMO (※2) 対応ワーキンググループが 1999 年に日本のモダニズム建築 20 選を選定した際に、モダニズムの定義とした「合理主義に立脚し、線や面、ヴォリュームという抽象的な要素の構成による美学をよしとする、社会改革志向に裏打ちされた建築運動」(『建築雑誌』

1999年4月号)を参照して、近代的生活への合理的対応、様式からの脱却、装飾性の排除、抽象的表現などのキーワードをもとに判断するものとする。これらのことにより、まず洋館やいわゆる近代洋風住宅は対象外とみなす。さらに1970年代以降盛んとなるポストモダニズム建築も対象外となる。

また日本でモダニズム建築を論じる際には必ずといっていいほど議論の対象となる「和の空間」の取り扱いについては、先の DOCOMOMO 対応ワーキンググループでも議論されていたように、「木造の伝統的な空間を組み入れないと我が国のモダニズムを論じきれない」(『JIA News』1999年8月号)という考え方に立脚するものとする。これにより、単にインターナショナルスタイルのみでなく、和風の意匠を持つものであっても上記の近代的合理精神に基づき設計されたと考えられる住宅は今回の対象とする。

以上の条件で阪神間の住宅をみていくと、1931年(昭和6年)の安井武雄自邸(西宮市雲井町)、1934年(昭和9年)の村野藤吾設計による中山悦治邸(芦屋市山芦屋町)などを阪神間モダニズム住宅のはじまりとするのが適当であろう。また DOCOMOMO 対応ワーキンググループの議論では、1970年代に入ると新しい建築思想が現れ、モダニズムはその有効性を失い終焉にむかっただとしており、基本的には1960年代までをモダニズム建築の対象と考えている。ただし、この稿では住宅の展開に関する考察を行なうために、さらに1970年代までを視野に入れることとする。

3. 雑誌『新建築』の戦後から1970年代頃

モダニズム建築が一般に定着し始めるのは戦後になってからであると考えられる。そこで、雑誌『新建築』に掲載された戦後の阪神間の住宅を調査した。調査したのは1946年1月号から1979年12月号までの34年間、一部未調査分を除いて合計375冊について、掲載住宅の総数、そのうちの関西圏(ここでは京都府、奈良県、大阪府、和歌山県、兵庫県に滋賀県、三重県を含めた範囲)のもの、さらに阪神間のものに分けて件数を出した。阪神間のものについては、さらに詳細にエリアを分け、各住宅についての一覧を作った。(表-1、表-2)

終戦の翌年1946年に復刊した『新建築』は、西山卯三などの戦後復興へ向けての論文掲載から新たなスタートを切った。その後、復興住宅としての組立住宅特集(1947年)や15坪および12坪の「小住宅圖輯」、あるいは池辺陽や清家清、吉阪隆正、伊藤喜三郎など気鋭の若手建築家が審査員を務めた「小住宅懸賞競技特輯」(1948年)などを通して、戦後の復興と新しい生活様式への提案を行った。1949年になると実際の建築を紹介す

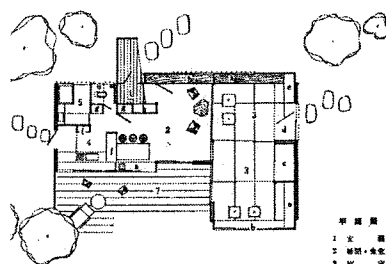


図-1. 15坪I型住宅平面 設計:福田良一
『新建築』1948年1月号

表-1.戦後～1970年代 阪神間のモダニズム住宅『新建築』掲載数

年	総数	関西圏	阪神間	尼崎	伊丹	宝塚	西宮	芦屋	神戸東	その年の代表的な住宅
1946										※1、2月号のみ調査
1947										※5月号のみ調査
1948	0	0	0							
1949	7	0	0							T氏邸の小住宅（広瀬鎌二）
1950	21	1	1				1			立体最小限住居（池辺陽）
1951	25	0	0							森於菟博士の家（清家清）
1952	36	1	1						1	最小限住居の試作（増沢洵）
1953	42	0	0							コアのあるH氏のすまい（増沢洵）
1954	47	1	0							私の家（清家清）
1955	38	2	2					1	1	坪井教授の家（清家清）
1956	54	3	1						1	栗の木のある家（生田勉）
1957	51	6	3				1	1	1	石津邸（池辺陽）
1958	49	4	3			1		2		スカイハウス（菊竹清訓）
1959	38	6	4			1	2		1	山田守邸（山田守）
1960	59	13	3				2		1	SH-30（広瀬鎌二）
1961	56	13	9		1	1	5	1	1	正面のない家（坂倉準三建築研究所）
1962	58	10	8			1	2	2	3	森の中の家（吉村順三）
1963	33	6	2				1	1		サニーボックス（藤木忠善）
1964	23	4	2			1		1		浜田山の家（吉村順三）
1965	38	8	5				1	4		壁の家（RIA建築総合研究所）
1966	36	3	1					1		白の家（篠原一男）塔の家（東孝光）
1967	32	6	4		1		1	1	1	伊藤邸（原広司）
1968	39	8	4			1		1	2	夫婦屋根の家（山下和正）
1969	37	5	2			1		1		井の頭の家（奥村昭雄）
1970	22	6	1					1		水無瀬の町家（坂本一成）
1971	39	5	4				3	1		ぶるうぱくす（宮脇檀）
1972	36	2	1				1			粟津邸（原広司）
1973	37	5	1					1		猪熊邸（吉村順三）
1974	32	5	2			1		1		SIH7311（鈴木恂）
1975	40	3	1					1		矢野邸（磯崎新）
1976	40	6	3				3			中野本町の家（伊東豊雄）
1977	62	12	5	1		2	1	1		北向きの家（林雅子）
1978	56	11	4			2	1	1		私たちの家（林昌二、林雅子）
1979	47	10	5			1	2	1	1	ドーモ・バレーナ（TEAM ZOO いるか）
合計	1230	165	82	1	2	13	27	25	14	

※関西圏：京都府、奈良県、大阪府、和歌山県、兵庫県に滋賀県、三重県を含めた範囲とする。

※神戸東：神戸市東灘区および灘区を示す。

未調査：1948年10月号、1959年3,9,10月号、1963年2月号、1964年1,3月号、1966年11,12月号、1976年5月号

雑誌『新建築』にみる戦後の阪神間の住宅

表-2. 戦後～1970年代 阪神間のモダニズム住宅 『新建築』掲載住宅リスト

年	月	タイトル	所在地	設計者	年	月	タイトル	所在地	設計者
1950	6	アメリカフェアー モデルハウス	西宮	竹中工務店	1965	7	O氏邸	芦屋	坂倉準三建築研究所大阪支所
1952	12	六甲山麓の英人住宅群・3棟	神戸 御影	ジャーディン・マセソン株式会社		7	M氏邸	芦屋	坂倉準三建築研究所大阪支所
1955	2	関西の住まい F氏邸	神戸	三座建築事務所		7	太田邸	芦屋	彦谷建築設計事務所
	3	猿丸・久保田邸	芦屋	広瀬建築技術研究所	1966	1	山本邸	芦屋市東山町	竹中工務店
1956	4	T氏邸	神戸 御影	東畑謙三	1967	1	旭丘の家	芦屋市城島	彦谷建築設計事務所
1957	6	父の家	西宮 上甲子園	戸尾任宏		1	高台の家	西宮市	日建設計工務大阪事務所
	11	父と子の家	神戸 東灘区	大林組		1	金子邸	伊丹市	大成建設大阪支店
	11	芦屋に建つH氏邸	芦屋	竹中工務店		7	バルワニ邸	神戸 六甲	坂倉準三建築研究所大阪支所
1958	1	崖の家	芦屋	清家清	1968	1	花屋敷の家	宝塚	彦谷建築設計事務所
	7	広瀬さんの家	芦屋	池亀暢雄		7	道幸邸	芦屋市山手	竹中工務店
	9	村野邸の増築	宝塚	村野藤吾		9	アトリエのある家	神戸 甲南台	美建・設計事務所
1959	5	I氏邸	神戸	東畑建築事務所		10	九重坂の家	神戸 御影	清家清
	6	田村邸	西宮	森京介建築設計事務所	1969	1	A氏邸	芦屋	坂倉準三建築研究所大阪支所
	7	河野邸	宝塚	竹中工務店		5	コートハウスの増改築	宝塚	坂倉準三建築研究所大阪支所
	8	吉田邸	西宮	彦谷建築設計事務所	1970	2	河崎邸	芦屋	竹中工務店
1960	1	A氏邸	西宮 甲陽園	坂倉準三建築事務所大阪支所	1971	1	西向きの家	西宮 桑畑台	美建・設計事務所
	6	Tさんのすまい	神戸 岡本	北田正利		1	N邸	西宮 名次町	竹中工務店
	7	吉岡邸	西宮	池亀建築設計事務所		1	土井邸	西宮 仁川町	竹中工務店
1961	1	正面のない住宅	西宮	坂倉準三建築研究所大阪支所		10	Y氏邸	芦屋 山手町	坂倉建築研究所大阪事務所
	5	N氏邸	西宮	彦谷建築設計事務所	1972	8	夙川の家	西宮	水谷顕介 武田則明 高月昭子
	5	小林邸	伊丹	藤木工務店	1973	7	長瀬邸	芦屋 六甲庄	竹中工務店
	5	吉川邸	西宮	大成建設大阪支店	1974	2	画家の家	宝塚 小林	美建・設計事務所
	5	F.B.邸	西宮 西宮東	増田太郎		8	石壁の家	芦屋	美建・設計事務所
	8	山芦屋の家	芦屋	大林組	1975	2	サロンのある家	芦屋 三木町	赤崎尚信
	10	傾斜地に建つ家	西宮 仁川	大林組	1976	2	Z邸	西宮 西平町	出江寛
	10	RIBI邸	神戸 御影	坂倉準三建築研究所大阪支所		2	T邸	西宮 入田ヶ谷	出江寛
	11	K氏邸	宝塚	建築制作研究所		9	甲東園の家	西宮 甲東園	東孝光建築研究所
1962	1	K氏邸	宝塚	坂倉準三建築研究所大阪支所	1977	1	回帰草案	西宮 甲陽園	美建・設計事務所
	3	六甲山に建つ山荘	六甲山	竹中工務店		8	粉生邸	宝塚	竹中工務店
	5	勾配屋根とスキップフロアーの住宅	?	竹中工務店		8	K邸	尼崎	水谷顕介+都市・計画・設計研究所
	9	浮島邸	西宮 旗川	鹿山富士夫・深谷浩一		8	駒杵邸	宝塚 仁川高木	高松伸
	10	正面のない家K	神戸 六甲	坂倉準三建築研究所大阪支所		10	末永邸	芦屋 奥山	AZ institute 環境計画研究所
	10	正面のない家H	西宮 西宮東口	坂倉準三建築研究所大阪支所	1978	2	領壁の家	芦屋 奥池町	安藤忠雄建築研究所
	10	棟持柱のある家II	芦屋	清家清		2	中島さんの家	西宮 奥山	美建・設計事務所
	10	S氏邸	芦屋	彦谷建築設計事務所		2	ゆずりは台の壺 (松下邸)	宝塚 小林	建築環境研究所
1963	10	西宮のM氏邸	西宮 名次町	坂倉準三建築研究所大阪支所		2	ゆずりは台の壺 (前田邸)	宝塚 小林	建築環境研究所
	10	野村邸	芦屋	坂倉準三建築研究所大阪支所	1979	2	剣谷の家	西宮 西谷町	美建・設計事務所
1964	4	逆瀬川の家	宝塚	彦谷建築設計事務所		2	W計画	芦屋	AZ institute 環境計画研究所
	5	集成梁による住宅	芦屋 六甲庄	RIA建築総合研究所		8	濱吉さんの家	神戸 東灘区	美建・設計事務所
1965	1	芦屋のS邸	芦屋	村野・森建築事務所		8	目神山の家	西宮 甲陽園	美建・設計事務所
	7	N氏邸	西宮	坂倉準三建築研究所大阪支所		10	標準住宅001 中野邸	宝塚	波辺豊和

るようになり、坂倉準三建築研究所の「中二階のある 11 坪二戸建住宅」（1949 年 1 月号、以下 4901 と表記）などの復興住宅を写真入りで紹介している。

1949 年 9 月号以降は独立住宅の掲載が始まるが、最初の頃は東京の住宅が主で、広瀬鎌二「T 氏の小住宅」（図-2）や前川国男「崖上の改造住宅」（共に 4910）など、明らかにモダニズム建築を意識した住宅が発表されている。その後も池辺陽「立体最小限住居」（5007、図-3）、清家清「森於菟博士の家」（5108）、増沢洵「最小限住居の試作」（増沢洵自邸、5207）、広瀬鎌二「SH-1」（5311）、増沢洵「コアのある H 氏のすまい」（5409、図-4）など、1950 年代前半に東京で建てられた日本のモダニズム住宅史上非常に重要な住宅が掲載されている。

この間、阪神間の住宅で『新建築』に掲載されたのは、西宮で行われたアメリカフェアに出品されたモデルハウス（5006、図-5）とジャーディン・マセソン株式会社設計監理部「六甲山麓の英人住宅群」（5212、図-6）のみで、1955 年以降になってから少しずつ掲載件数が増えていることがわかる。

独立住宅の掲載総数や関西圏の掲載数については、東京の出版社（創業は大阪）であることや当時の編集方針と関係してくることなので、これだけではその数字自体にあまり重要な意味を読み取られるものではないが、関西圏掲載数のうちの半数近く、49.7%が阪神間というごく限られた地域の住宅であることは注目すべきであろう。このうち 1950 年代は関西圏掲載数のうちの 62.5%（15/24）、1960 年代は 52.6%（40/76）、1970 年代は 38.8%（33/85）が阪神間の住宅というように、関西圏の住宅の掲載が始まった当初の方が阪神間住宅の率が高いことがわかる。このことにより関西でのモダニズム住宅の展開は、主に阪神間を中心にして始まり、その後大阪などの周辺に広まったと考えられる。またエリアとしては西宮、芦屋が多く、両エリアの合計掲載数は阪神間掲載数のうちの 65.9%を占めている。次いで多いのが神戸東部と宝塚となっている。尼崎と伊丹はごく少数であった。

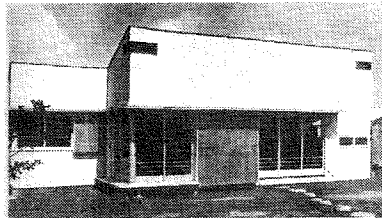


図-2. T 氏の小住宅 設計:広瀬鎌二
『新建築』1949 年 10 月号

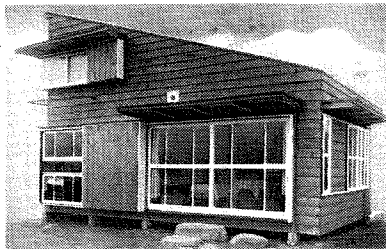


図-3. 立体最小限住居 設計:池辺陽
『新建築』1950 年 7 月号



図-4. コアのある H 氏のすまい
設計:増沢洵 『新建築』1954 年
9 月号

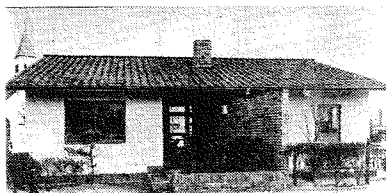


図-5. アメリカフェア モデルハウス
設計:竹中工務店
『新建築』1950 年 6 月号



図-6. 六甲山麓の英人住宅群
設計:ジャーディン・マセソン株式会社
『新建築』1952 年 12 月号

また、1970年代になるとモダニズムとは違ったより新しい考え方で建築を組み立てていく、いわゆるポストモダニズムに属すると考えられる建築家の設計した住宅が現れてきていることがわかる。

4. 関東のすまいと関西のすまい

『新建築』1955年2月号に徳永正三（三座建築事務所）「関東のすまいと関西のすまい」という文章が掲載されている。この中で徳永は「村野藤吾氏設計の中山邸・兵庫県芦屋（昭和9年）や、堀口捨巳氏設計の山川邸・兵庫県西部（昭和13年）が誌上に発表されたときの感動は今も尚忘れることができない。」と述べ、その頃には関東でも関西でも国際様式建築と呼ぶような住宅がさかんに建てられ、関東・関西という地域的な差異は殆ど認められなかったとしている。

その後、関西では藤井厚二、笹川慎一、小川安一郎などが独自の作風を作り出していったものの、戦争による中断や彼らの死によって関西建築界は「空白状態がしばらくつづいた。」と述べている。さらに「戦後9年を経て、確かに関東と関西の住宅の違いが表われはじめた様に思われる。」として、関東の専門誌は建築一般の問題を取りあげて激しく戦っており、「小さな作品でも筋を通して線にのせる努力を惜しまない」のに対して、関西では専門誌の数も少なく、「今少し本質的な問題を取りあげてほしい」と感想を述べている。特に関西では資産として住宅を建てる風習があり、その上経済観念も強く、家を売却するときによりよい価格で売却できることが求められる傾向にあるとしている。さらに関西では毎年1回住宅展覧会が開催され、請負業者の設計施工による土地付住宅即売会となっており、住宅需要者層に格安で住宅を買えそうだと印象を与えていたとしている（図-7、8、9）。これら徳永の文章にあらわれているのが、当時の関西での住宅を取り巻く状況であり、この時期の関西で建築家の設計によるモダニズム住宅の数が少ない理由の一つであろうと考えられる。



図-7. 豊中分譲住宅 主催:大阪府住宅課
竹中工務店 『新住宅』1949年
11月号

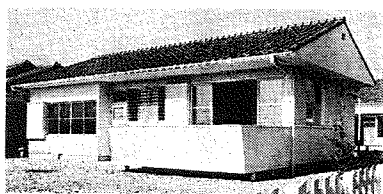


図-8. 羽衣住宅展 主催:大阪府
大林組 『新住宅』1952年
11月号

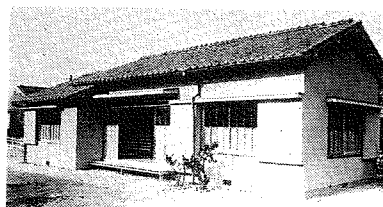


図-9. モデル分譲住宅展示会
主催:大阪府
大成建設 『新住宅』1955年1月号

5. 関西とモダンリビング

『新建築』1957年2月号に西山卯三「関西とモダンリビング」という文章が掲載されている。1956年春に大阪朝日新聞社主催の〈楽しい生活と住宅博覧会〉が行われた際に、鉄筋コンクリートモデル住宅の設計を全国に公募し、村野藤吾、坂倉準三、滝沢真弓、西山卯三、池辺陽、山口文象が審査員となって入選案が選ばれた。その後、近畿日本鉄道（以下、近鉄）がその入選案を主体にして、審査員の山口文象、池辺陽設計の案を含めて、20戸の鉄筋コンクリート独立平屋建住宅を近鉄学園前駅のすぐ近く、区画整理された高台の住宅地に建設し、その他木造住宅数戸とともに1956年11月3日から12日まで〈理想的な現代住宅〉展示会として展示販売会が行われた。西山卯三の文章はその展示販売会の結果を受けて書かれたものである。

展示販売会の結果は、近鉄の期待していたものとは食い違い、散々なものとなってしまった。つまり、入選案をもとに建設された鉄筋コンクリートモデル住宅に、ほとんど買い手が付かなかったのである。特に山口、池辺両案には全く買い手が付かず、この記事が掲載された時点でも売約のないままであった。記事には各方面からの批評の文章も掲載されており、この中で近鉄土地経営部の意見として、「〈理想的な現代住宅〉展示会の呼びものとして、思い切り変った住宅で、話題を提供して貰ったから、使命の一部は達せられた」としながらも、部内に「建築家が遊んどる」とする意見もあったことが書かれている。さらに山口、池辺両案については、「ある人はニワトリ小屋だといい、ある人は喫茶店だといい、また葬儀自動車だとも物置だともこじき小屋だとも評している」との冷評があげられた。

西山卯三はまず審査の過程を振り返って、応募設計図を通覧したときの感想として「東京の小住宅作家たちがここ数年間、各種の建築（モード）雑誌を中心として展開しつづけたカンパニアの偉大な成果をまのあたりにみた。戦後のいわゆる《モダンリビング》の傾向一色にそれらはぬりつぶされていたといえる。」と述べ、「そういう空気の中で、そうした流れの

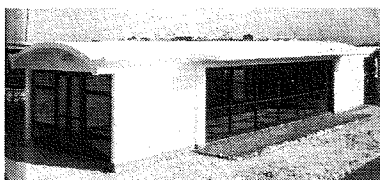


図-10. 〈理想的な現代住宅〉展示会 G 型
設計: 建築総合研究所 RIA・山口文象
『新建築』1957年2月号

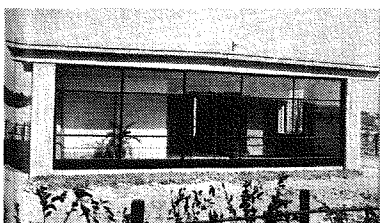


図-11. 〈理想的な現代住宅〉展示会 H 型
設計: 池辺研究室・池辺陽
『新建築』1957年2月号



図-12. 理想的な現代住宅〉展示会 A 型
設計: 高橋静一、伊藤伸利、中里英二他
『新建築』1957年2月号

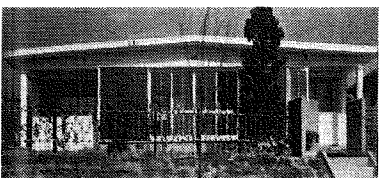


図-13. 〈理想的な現代住宅〉展示 D 型
設計: 石川清隆
『新建築』1957年2月号

先端をもって指導的な役割を果たしてきたといいうる遠来の山口・池辺両審査員は非常に活潑な意見をのべていた」とし、西山の率直な感じとして、山口・池辺の評価が全体の審査員の空気をリードしていたとしている。その結果、入選した案は建築家的創造の価値を評価されて選ばれたものとなり、「住宅経営者の既成観念や、常識的な需要者層の住宅に対する考え方を改革していく積極的な使命をになっている」としながらも、それが近鉄の負担の上で建設されることには、「非常に危険の多い試みであるだろうという予感はしていた」と述べている。

さらに「大阪の需要者層はこれらのモダン住宅に明らかに反パツした」とし、これらの住宅が「関西の住宅を求める人々にうけなかった」理由のひとつとして、「住宅に対する考え方の一つのコモン・センスがある。関西流の常識である」とし、それは「関西流の地方的このみ、つまり「地方性」なのである」としている。それは「関西の持家階層の住居観の特性、それが東京のそれと著しくちがっているということだ。それは流行を追う（悪くいえば）新らしがりや一開花的な東京の一部の需要者層のもっている新しいものへの盲目的な積極性に対置される、伝統的なもの、ある意味では保守的な考え方だ」として、売れゆき不振と悪評は、そうした「地方性」という問題がからみついている住宅階層分析の不足」が原因ではないかと述べている。

また、山口が「こういった住居観を温存させる役割を果たしていると指摘した雑誌『新住宅』などの意義は無視できないかもしれない」としている。このことは、前章でみた徳永の文章でも同じことが書かれていたが、数少ない大阪の出版社である新住宅社が発行していた雑誌『新住宅』では、ごく稀に新しい住宅観で設計されたモダニズム住宅が紹介されることもあるが、掲載されているほとんどの住宅は伝統的で保守的なものが多く、また請負業者の設計施工の土地付住宅即売会である住宅展覧会の特集がよく組まれている（図-7、8、9）。さらに『新住宅』編集部そのものが住宅販売の問い合わせ窓口になり、建売分譲住宅の販売促進をおこなっていた。

このように、先の徳永の文章、および西山の記事は1950年代の関西での住宅に対する一般的な意識や住宅を取り巻く状況をよく表しているといえる。

6. 1950年代の阪神間

前章で見たように関西の住宅需要層のなかにモダンリビングへの反パツがあった時期に、阪神間ではどのような住宅が建てられていたかをみてみることにする。先の『新建築』のデータだけではこの時期の関西圏の住宅掲載数が不足しているので、その他の雑誌に掲載された建築家の設計による主要な住宅を合わせて、竣工年でみると表-3のようになる。1950年代、大阪ではモダニズム住宅がほとんど受け入れられていなかったころ、阪神間では少しずつモダニズム住宅が建てられはじめていたことがわかる。

当時の阪神間での住宅に対する意識の状況をさぐるために、これらのうちのいくつかの住宅について、掲載された記事からその住宅が設計・建設されるにいたった経緯について詳しくみていくことにする。

表-3. 1950年代 阪神間のモダニズム住宅 『新建築』及びそれ以外の雑誌掲載リスト

年	タイトル	所在地	設計者	掲載誌
1951	西谷邸	西宮	坂倉準三建築研究所大阪出張所	新住宅5105
	夙川の住宅	西宮	浦辺鎮太郎	新住宅5201
1953	鈴木邸	芦屋	坂倉準三建築研究所大阪支所	国際建築5408
	T氏邸	西宮	坂倉準三建築研究所大阪支所	国際建築5612、建築文化5702
1954	室賀邸	西宮	坂倉準三建築研究所大阪支所	新住宅5601、国際建築5612、建築文化5702
1955	猿丸・久保田邸	芦屋	広瀬建築技術研究所・広瀬謙二	新建築5503
	M氏邸	西宮	坂倉準三建築研究所大阪支所	国際建築5704、建築文化5702
	塩野邸	西宮	坂倉準三建築研究所大阪支所	国際建築5612、建築文化5702
	T氏邸	御影	東畑謙三	新建築5604
	浦邸	西宮	吉阪隆正	建築文化5607
	村川邸	西宮	坂倉準三建築研究所大阪支所	新住宅5611、国際建築5612、建築文化5702
	崖の家 蟻田邸	芦屋	清家清	新住宅5801、新建築5801
	父の家	西宮	戸尾任宏	新建築5706
	1958 高松邸	尼崎	坂倉準三建築研究所大阪支所	新住宅5811

・夙川の住宅 設計：浦辺鎮太郎 1951年

浦辺は「施主が外地の生活を経験しており、純洋風の生活を望まれた。住生活に対する思想が統一されていて、設計者も非常に興味を持って、やりやすい設計であった。」(『新住宅』5201)と述べている。

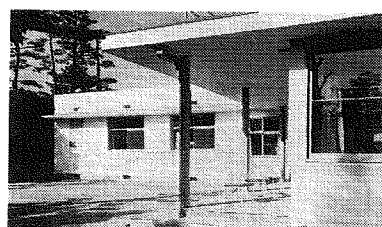


図-14. 夙川の住宅 設計：浦辺鎮太郎
『新住宅』1952年1月号

・猿丸・久保田邸 設計：広瀬謙二 1955年

工業生産を目的とした単純工程の試作小住宅であり、すべて企画者の構想により広瀬が設計を行い、完成した住宅が住み手に提供されるという特殊な事例である。着工直前まで広瀬と住み手の間には交渉がなく、当時東京でさかんに提案されていたモダニズムの小住宅を阪神間という企画意図による住宅である。

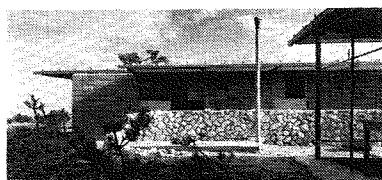


図-15. 猿丸・久保田邸 設計：広瀬謙二
『新建築』1955年3月号

・T氏邸 設計：東畑謙三 1955年

掲載記事には明記されていないが、記事の中の設計者自身が書いた文章の内容から考えると、東畑の自邸であろうと思われる。



図-16. T氏邸 設計：東畑謙三
『新建築』1956年4月号

・浦邸 設計：吉阪隆正+U研究室 1956年

吉阪と施主の浦氏の最初の出会いはマルセイユである。ル・コルビュジェのもとでマルセイユのユニテの現場に来ていた吉阪が留学のためにやってきた数学者である浦氏を出迎えた。浦氏はフランスでコルビュジェの

建築を体験し、帰国後吉阪に住宅の設計を依頼した。

・村川邸 設計：坂倉準三建築研究所大阪支所 1956年

施主の村川氏は大学の講師であり、「日本の住宅の伝統であろうが、あの重苦しい瓦屋根にはうんざりするし、和風と洋風とを継ぎ合わせただけの家はもう沢山だ。合理化された生活様式、そしてそれがにじみ出ているうつくしい家が欲しかった。この夢が進歩的な設計家、センスのある現場監督によって、立派に実現したのだからその喜びは大きい。」(『新住宅』5611)と書いている。

・崖の家 蟻田邸 設計：清家清 1956年

施主の蟻田氏はイベント・展览会や店舗等のデザインの仕事をしており、その関係で清家清と協同で仕事をし、生活や建築についての意見もお互いによく理解し合っている間柄であった。その後、蟻田氏が関西に来て家を建てるにあたり、設計を清家に依頼した。

・父の家 設計：戸尾任宏 1956年

設計者の戸尾が自身の父母のために建てた家である。なお戸尾はこの当時坂倉準三建築研究所に在籍していた。

ここで読み取られることは、この時期に阪神間で建てられたモダニズム住宅は、けっして一般的な庶民のものではないということである。海外での生活に親しんだ経験のある人、大学の講師、デザイン関係の仕事をしている人、企画住宅など、より新しい生活様式に敏感で、積極的にそれを取り込んでいこうとする精神の持ち主たちが、建築家に設計を依頼し、自分たちの夢を実現していったことから、関西でのモダニズム住宅の展開が始まったと考えることができる。

この当時の阪神間には、そういった新しい感覚や考え方を持った人が多く住んでいて、そのことが阪神間において関西のほかの地域よりも早くモダニズム住宅が認められていった理由のひとつであると考えられる。このことにより、たとえば明治のおわりから昭和のはじめにかけて、阪神間が良好な別荘地や郊外住宅地として発展してきたことと同じ状況が、戦後にもなお続いていたといえる。

さらに1950年に西宮で行なわれたアメリカ・フェアや外国企業の建設した外国人向け住宅が建設されたことなども阪神間でのモダニズム建築の展開に影響を与えていた。

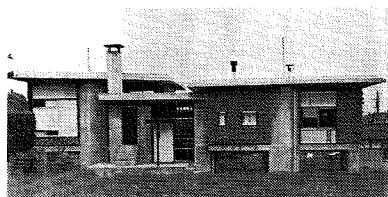


図-17. 浦邸 設計：吉阪隆正+U研究室
『建築文化』1956年7月号

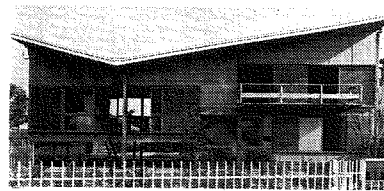


図-18. 村川邸 設計：坂倉準三建築研究所
『新住宅』1956年11月号



図-19. 崖の家 蟻田邸 設計：清家清
『新住宅』1958年1月号

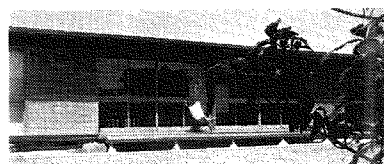


図-20. 父の家 設計：戸尾任宏
『新住宅』1957年6月号

7. おわりに

この稿では雑誌『新建築』に掲載された戦後の住宅を調査することによって、阪神間でのモダニズム住宅の展開が、いくらかでも明確になるのではないかと考察を進めてきた。

1940年代おわりから1950年代前半に、東京では戦後復興の中で新しい生活様式による小住宅提案としてモダニズム住宅、モダンリビングという考え方が盛んに行われていたが、関西では伝統的・保守的な考え方が強く残っており、モダニズム住宅がなかなか受け入れられない状況にあった。その状況の中で阪神間に住む新しい生活様式に敏感な人たちによって、少しずつモダニズム住宅が受け入れられていき、関西でのモダニズム住宅の展開が主に1950年代の阪神間から始まったと考えられ、その後1960年代から阪神間でのモダニズム住宅の定着と他のエリアへの広がりへと展開していったと考えられる。

このことは、1956年の〈理想的な現代住宅〉展示会で良い結果が得られなかった近鉄が、4年後の1960年に同じ学園前駅の近くで〈登美ヶ丘住宅団地〉(『新建築』6012)として再び建築家によるモダニズム住宅の展示販売を行ったことからわかる。〈登美ヶ丘住宅団地〉では、前回の反省として大阪に事務所のある建築家15名に鉄筋コンクリート造と木造それぞれ1戸ずつ依頼し、大阪の住宅需要層を意識したモダニズム住宅の提案を行っている。関西の建築家による関西の住宅需要層のためのモダニズム住宅という提案であり、関西でのモダニズム住宅定着の先駆けとなったと考えられる。

最後に、先にあげた『新建築』に掲載された阪神間の住宅の一覧(表-2)を見てみると、戦後から1970年代までの阪神間での住宅掲載数82件のうち、最も多い設計者は、坂倉準三建築研究所大阪支所(担当:西澤文隆、以下坂倉・大阪)の15件で、次いで竹中工務店の12件、

美建・設計事務所の9件と続いている。特に坂倉・大阪はモダニズム住宅が関西で定着していったと考えられる1960年代に掲載が集中しており、60年代の掲載数40件のうち約1/3強の14件となっている。さらに表-3でわかるように1950年代にも『新住宅』や『国際建築』『建築文化』の坂倉準三特集号などで阪神間での住宅の掲載がみられ、坂倉・大阪は1950年代から60年代の阪神間で精力的にモダニズム住宅の設計およびメディアへの発信を行っており、関西でのモダニズム住宅の展開に重要な役割を果たしていた。

今回の考察では戦後から1970年代までの阪神間の住宅を関西の他地域の動きとともに概観したが、今後は戦後から1960年代を中心に、西澤文隆など阪神間で活躍した建築家に注目して、さらに詳しく調査・考察していきたい。

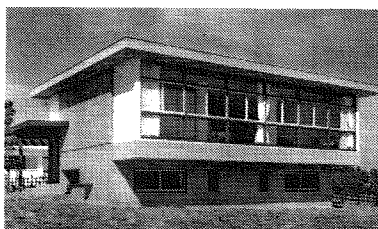


図-21. 〈登美ヶ丘住宅団地〉

R-3 設計: 松田平田設計事務所
『新建築』1960年12月号



図-22. 〈登美ヶ丘住宅団地〉

R-4 設計: 宇賀一郎設計技術研究所
『新建築』1960年12月号

(※1)「モダニズム住宅」とは、正確に表現するなら「モダニズムの理念に基づいて設計された住宅」であり、英文表記の“Modern houses”に合わせて「モダン住宅」と表現するべきであるが、日本では明治から昭和初期にかけて建てられた洋館や洋風建築についても、日本の伝統的な住宅に対して「モダン住宅」と表現をすることが一般化しており、この稿で扱っている住宅を正確に表現しきれないと考えた。この稿では対象をより限定的に表現するために「モダニズム住宅」という言葉を採用しているが、これが適切であるかどうかはさらに検討を要するものであろう。

(※2) DOCOMOMO(ドコモモ)とは、正式名称を The Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of the Modern Movement といい、モダン・ムーブメント（近代運動）やその理論的基盤であるモダニズム（近代主義）に歴史的価値を認め、それに関わる建物や資料を保存する意義を訴えることを目的とする国際組織である。2000年9月には DOCOMOMO Japan が正式に支部として承認され、これまでに日本の近代建築のリスト（100件）を整備しながら、展覧会、見学会、シンポジウム、研究会、国際交流などを行っている。（DOCOMOMO Japan ホームページより引用）